

Hamamatsu Museum of Musical Instruments

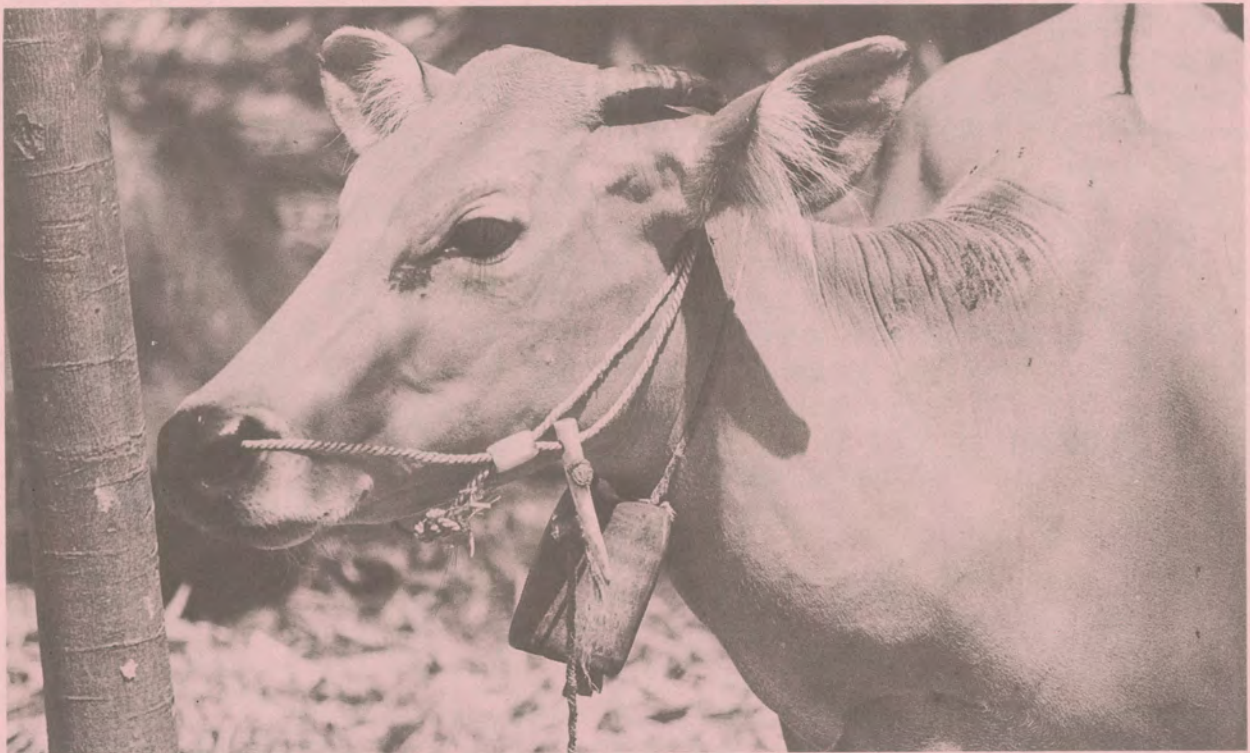
浜松市楽器博物館だより

No. 6

1996. 12. 30

楽器のある風景

——牛とベル——



木製ベルをつけた牛。インドネシア・ロンボク島にて。

1997年の干支は丑(牛)。牛にちなんだ楽器と言えば「カウベル」。ヨーロッパでもアジアでもたくさん見られます。さてそのカウベルの起源は、ということであれこれと考え調べてはみたものの、わからずじまい。ものの本には、動物にベルをつけて動きとともに出る音を楽しんだとか、位置を知るためとか、蛇などの害獣から身を守るためとか諸説ありますが、どれももっともな説。でもそのはじまりは、となるとやはりわからないようです。

ところでこの「ベル」という楽器、構造や鳴らし方によりいろいろな種類があって、日本では鈴(すず、れい、りん)、鐘(かね)、鐸(たく)などとよんで区別しています。どちらがうのかというややこしい話はここではやめておき、もっと面白い性質に注目してみましょう。それは、ベルは祈りの場面につきものだということです。

年末年始の3大行事を考えても、クリスマスにはサンタのそりの鈴と教会の鐘、大晦日にはお寺の除夜の鐘、お正月には初詣の神社の鈴と、ベルは祈りに欠かせない楽器です。

巫女さんが使うのは鈴、お守り袋に付いているのも鈴。研究者によれば鈴には魔除けの力があるとかで、子どもの衣服やはきものに鈴をつけるのもその例ということ。財布に付ける鈴はお金がたまりますよというお祈りなのかしら。結婚式には幸せの鐘、なぜか日本のあちこちにカリヨンの塔。猫に鈴、家の鍵やキーホルダーにも鈴。考えてみれば鈴などのベルを使う場面はまだまだいくらでも出てきます。ひょっとしたらこのベルは日本で、いや世界で一番多く使われている楽器なのかもしれません。

話は始めにもどって「カウベル」。頭に浮かぶのはスイスの風景—アルプスの麓、緑の草原。そよ風のすきまから聞こえてくるカウベル……「カラーン……カラーン……。」そんな風景に逢いたくてアルプスに行きました。しかし、想像してみてください。サイズの違うカウベルを付けた何十頭もの牛がそれぞれ勝手なスピードで同時に動いたらどんな音がするかを。「ランコロンランコロンランコロンコロン×××××。」そして止め的一声「モオーッ！」私はそのショックからしばらく立ち直れず、首にベルをつけて不思議そうにこちらを見ている牛さんと、しばらくにらめっこをしていました。「牛さん、決して君が悪い訳じゃないよ……。」と自分に言い聞かせながら。(K.S.)

博物館実習を終えて

去る7月30日(火)から8月10日(土)までの10日間、博物館実習を行いました。博物館実習とは、将来博物館施設(美術館や動物園なども含まれます)で学芸員として働くことを目標に勉強している学生の実習で、教員を目指す学生の教育実習と同じようなものです。

今年は、大学で音楽教育学等を専攻している学生12名が参加しました。楽器博物館としては、平成7年4月の開館以来、はじめての実習生受け入れでした。実習内容は、主に、資料の取り扱いに関する実習、事業(講座・ワークショップ・レクチャーコンサート)への参加、展示に関する実習を行いました。

資料の取り扱い方に関する実習では、保守点検日にあわせ、日本の楽器コーナーの資料を使って資料の扱い方や掃除の仕方、展示の仕方等を勉強しました。

講座やワークショップでは、生涯学習の場としての博物館のあり方を考えたり、実際に子供たちと接しながら、その1つの形であるワークショップに取り組んだりしました。また、レクチャーコンサートでは、会場設営などの準備作業から片づけまで、1つの事業の流れを体験しました。

期間中、最も時間をかけた展示の実習では、小規模展示の企画から展示までをグループで取り組み、一般来館者の方々にもその成果としての展示を見ていただきました。(右の写真は、その展示の様子です。)

「最初は、楽器博物館を表側(一來館者)からの目で見えていたが、実習を終えた今、無意識のうちに裏側(学芸員)からの目で見ている自分に気がつき、とても驚いている。」という実習生の言葉がとても印象的でした。私たちにとっても、この実習は非常に刺激的で勉強になりました。



事業報告

- 日本の洋楽文化史「明治ハイカラ音楽の実像」9月7日(土) 14:00~16:00

アクトシティ浜松研修交流センター 講師:塩津洋子さん(大阪音楽大学音楽文化史研究室講師)

日本人が本格的にヨーロッパ音楽に接しはじめたのは、明治時代です。この頃、日本人はどのようにヨーロッパ音楽を受け入れたのかについて、録音・演奏会プログラム・新聞記事などを用いて考えてみました。熱心な質疑応答が交わされました。

- 特別展「敦煌壁画復元楽器展」9月28日(土)~10月27日(日) 第3展示室

関連講演会「音を甦らせた敦煌学」10月12日(土) 14:00~16:00 講師:西岡信雄さん

(大阪音楽大学教授)

中国・敦煌の莫高窟壁画から復元された楽器を紹介し、楽器・音楽の面から、古代シルクロード文化交流の様子を考えてみました。5,000人を越える方々が見学されました。(下の写真はその様子です。)

また、会期中の関連講演会では、莫高窟から発見された古譜が、実際に耳に聴くことができる音楽へと復元されるまでの経緯について、お話をうかがいました。

- 楽器製作現場見学会 9月21日(土) 午後

竜洋町にある株式会社セイリュウと東洋ピアノ製造株式会社を訪ね、ピアノの製造過程について、材料から完成までの様子を見学しました。台風接近中というあいにくの天気でしたが、小学4年生から大人まで22名が参加し、普段なかなか見ることのできない一つ一つの作業を、間近に見せていただきました。

- 第10回レクチャーコンサート「ジュゴッグ」

10月5日(土) 14:00~15:45

アクトシティ浜松研修交流センター

演奏:名古屋音楽大学「スカル・サクラ」

お話:栗原幸江さん(名古屋音楽大学助教授)

インドネシア・バリ島の竹琴「ジュゴッグ」の迫力ある演奏を、解説付きで楽しみました。会場のお客様が実際に演奏を体験する場面もあり、ジュゴッグファンが生まれたようです。



かつて少年時代に読んだエミリー・ブロンテの「嵐が丘」、キャサリンとヒース・クリフの大人の愛、国によって、風土によって、そこに住む人びとの愛情の形もいろいろだなあ、ロンドンの郊外イェトリーにステイしていた時には、あたり一面にヒースが繁り、「嵐が丘」の情景に思いをよせ、パブで飲んだなあ——などと機内で考えながらとうとうと。

着きました。ロンドンのヒースロー空港です。地下鉄で市街のホテルへ向います。翌日は、ポンド・ストリート北西にあるトニー・ビンガムさんのお店にうかがいます。一階には、ルネサンス・バロック時代の楽器や民族楽器が所狭しと並べられています。二階には楽器に関する書籍が天井高く配架されています。また地下には、明治時代に日本から流失したと思われる鑿(きん)が10数個、金石文(きんせきぶん)を見るかぎりいずれも有名寺院のもので、びっくりしました。

さて、翌日からは、いよいよ梱包作業です。郊外の倉庫に運ばれていた楽器を、一点一点チェックしていきます。今回の資料はヨーロッパの太鼓類やカスタネット、シンバル、グラスフォーンやミュージカル・グラスです。特に材料がガラス製のものは壊れたら終わりです。ガラスや皮の劣化状態を把握し、最もよい方法で梱包します。

皮は太鼓の内側の気圧と外側の気圧が同じになるよう、ネジをゆるめたり、分解してゆったりして、外側から板で鼓面を保護していきます。これは飛行機による気圧変化に対する処置です。

ガラス製品の梱包は次の要領で行います。まず、薄様紙をあて、次にネル布、その上にターポリン紙をあて、エアーキャップで包みます。中箱のダンボール箱には、ピーナツと呼ばれる発泡スチロールのクッション材と、フトンと呼ばれる綿を薄様紙でまいたもので固定していきます。

物が物だけに慎重にならざるを得ません。時間も体力もつかいます。

最後に、トニー氏に、もしガラスが割れたらどうしようかと話しかけたところ、彼はマジメで『大丈夫、東京の大井町の〇〇会社にこれらガラス製品を作る技術があるから……』との事。一件落着？ (O.G)



収蔵資料&展示コーナーの紹介

リ ラ

リラは胴に2本の腕木がとりつけられ、その先端に横木がついています。そしてその横木から胴へ数本の弦が張られています。一見するとハープに似ていますが、ハープは三角形の二辺に斜めに弦が張られているのに対し、リラは胴、2本の腕木、横木から構成された四角形の枠型に弦が張られています。

現在、リラはアフリカを中心に、独奏用や吟遊詩人の弾き語りにも用いられます。特に結婚式などの行事で演奏されることが多く、余興には欠かせない楽器の一つです。また治療を目的とした魔術的な儀式にも用いられることもあります。

リラの歴史は大変古く、メソポタミアの遺跡では紀元前3000年のものが発見されています。また古代のエジプトや地中海諸国でも使われていたようです。ヨーロッパでは、神話の中の神々がリラを持った絵画や彫刻が数多く残っています。

リラの誕生はギリシア神話の中では、「ヘルメスが亀を捕まえて、甲羅をはぎ取り、それに牛の皮を張って胴を作り、鹿の角を2本とりつけ、横木を渡し、亜麻糸を張って作った」とされています。

リラはこのようにギリシア神話に多く出てくることから、ヨーロッパではルネサンス以降、音楽を象徴するものとされてきました。そのため賛美歌集や音楽書の表紙に描かれたり、グロッケンシュピールの外枠として使われました。また19世紀のグランドピアノのペダルの支柱にデザインされたり、アメリカのピアノメーカー、スタインウェイ社のマークとしても使われています。(T.S)



アフリカのリラ



リラを演奏する女王セミラミス



ピアノのペダルの支柱(エラール 1842年) スタインウェイ社のマーク



お知らせ ———— 新しい楽器が常設展に仲間入りしました

ソプラノ・サクソフォーン アドルフ・サククス製作 (1860年・パリ)
 アルト・サクソフォーン アドルフ・サククス製作 (1859年・パリ)
 テナー・サクソフォーン アドルフ・サククス製作 (1861年・パリ)
 バリトン・サクソフォーン アドルフ・サククス製作 (1860年・パリ)

サクソフォーンはアドルフ・サククス (1814~1894) が1840年頃に発明した楽器です。音量が非常に豊かで、音色も柔らかい音から鋭く力強い音まで出すことができます。吹奏楽では金管楽器と木管楽器の仲介役として重要です。またジャズにおいては欠かすことのできない楽器の一つです。今度常設展に仲間入りした4種のサクソフォーンは、発明者であるアドルフ・サククス自身が製作したものです。

これからの事業スケジュール

平成9年1月25日(土) 14:00~16:00 研修交流センター (申込制)

講座「浜松楽器風土記-普大寺と尺八」 講師:当館学芸員

虚無僧寺として有名だった普大寺と尺八の関係についてお話しします。

平成9年1月28日(火)~3月2日(日) 楽器博物館第3展示室

新着資料展

今年度に収集した資料を紹介します。

平成9年2月22日(土) 14:00~16:00 研修交流センター (申込制)

講座「県内芸能調査中間報告会」 講師:当館学芸員

平成9年3月20日(木・祝) 14:00~16:00 研修交流センター (大人1000円、小人500円)

第12回レクチャーコンサート「ペルシアの音楽と楽器」

平成9年3月25日(火)~5月11日(日) 楽器博物館第3展示室

(大人600円、中人300円、小人150円常設展観覧料含)

第4回特別展「ペルシアの音楽と風土」

ペルシアの楽器と音楽・風土について紹介します。

9月~11月までのあゆみ

平成8年

9/7 講座「日本の洋楽文化史-明治ハイカラ音楽の実像」開催

9/21 楽器製作現場見学会開催

9/28 アジア・アフリカ展示室オープン

第3回特別展「敦煌壁画復元楽器展」開催 (~10/27)

10/5 第10回レクチャーコンサート「ジュゴック」開催

10/12 特別展講演会「音を甦らせた敦煌学」開催

10/26 講座「楽器の東西交流史、シルクロードのリュート属」開催

11/3 文化の日に伴う無料開館

11/6 日本博物館協会全国大会出席

11/23 講座「楽器の東西交流史、つづみ・その形とルーツ」開催

11/24 第5回浜松市生涯学習フェスティバルにて「楽器をつくろう」開催 (於:クリエート浜松)

9月~11月の観覧者数

大人	個人	15,069
	団体	4,415
中人	個人	278
	団体	311
小人	個人	1,970
	団体	1,623
幼児		738
合計		24,404

利 用 案 内

開館時間:火曜日~日曜日 午前9:30~午後5:00

休館日:月曜日(祝日にあたる時は開館)、祝日の翌日、年末年始、
 その他資料整備等のために定める日

- 祝日前後の開館日については、変更することがございます
 ので当館にご確認下さい。 -

観覧料: 個人 団体(20人以上) 団体(80人以上)

大人(大学生以上) 400円 320円 240円

中人(高校生) 200円 160円 120円

小人(小・中学生) 100円 80円 60円

※館内には、貴重品以外のお荷物は持ち込みできません。

浜松市楽器博物館だより

1996年12月30日発行

No.6

編集 浜松市楽器博物館

〒430 静岡県浜松市板屋町108-1

TEL 053-451-1128

FAX 053-451-1129

印刷 株式会社 シバプリント